

## 在職18年を振り返って

飯野 徹 雄 (植物学教室)

理学部教授としての勤めを了え退官するに当たり、まず、理学部の温かい雰囲気の中で楽しく教育、研究に終始できたことにつき、学部関係者の皆様にお礼を申し上げます。

18年前に、住み慣れた国立遺伝学研究所からの配置換えが決まった時には、卒業した母校に戻るとはいえ、一抹の緊張を感じていた。それは一つには、研究に専念していた状態から、教育と研究という二本建ての職務に移ることになり、果して教育の任が十分に果たせるだろうかという不安を抱いたためであり、もう一つは、学園紛争での大学教官の大変な様子を聞かされていたので、一応紛争が治まったとはいえ、応微研等のくすぶりが続いている状態で、紛争に免疫のない私がうまく対処してゆけるのかと気遣ったためだった。しかし私を迎えてくれたのは、予想以上に平静な学部教室の雰囲気だった。そしてスタッフや学生たちの勉学にたいする真面目な態度にほっとしたものだ。

私は昭和26年に理学部植物学教室を卒業して一年余りで、大学院生活の半ばに国立研究所へ就職した。当時は第二次世界大戦後の再建時代で、教室では学生も含めて体制改革の議論が日々続けられていた。それに食傷気味になっていた私は、大学を離れることに一種の安堵感を抱いたものである。そして私が教授として再び大学にもどった時期は、いうなれば学園紛争後の再建期に当たっていた。しかし、同じ再建の時代ではあっても、前者は外からの統制による秩序から解放された時代であり、後者は内部的混乱への倦怠感から、自律的秩序を求めた時期であったといえるだろう。そうした時期にいわば学園紛争の戦後派として大学に戻り、落ち着いた学園生活を過ごすことができたのは、私にとって非常な幸せだった。この雰

気は私の在任中多少の波乱をふくみつつも持続し、現在にまで及んでいるように思われる。

東大に赴任してみると、実際に私が感じたショックは、そうした事柄とは別の所にあった。それは、小規模の文部省直轄研究所という機構の中から、巨大な総合大学という機構の中へ移ったことによる、運営上のギャップだった。直轄研の研究部長として、所内の意見を一段階の話し合いで取りまとめ、文部省に電話一本で掛け合っていた事柄が、東大に移ると先ず教室レベル、ついで学部レベルの審議を経、さらに全学レベルに持ち上げられ、それぞれの段階で選別や調整が加えられ、しばしば本来の意図が薄められ、多大の時間を費やして文部省の担当官にまで到達する。当初はそうしたルールを知らずに行動して、当時の事務長から注意を受けたり、戦艦大和のようなものでやがて沈没するぞどうそぶいて、先輩からたしなめられたりしたものである。こうした想いは、昭和51年から52年にかけて総合大学院問題専門委員会の生命科学小委員会委員として、また昭和54年度に総長補佐として大学院と付置研究所の問題を担当した際にも強く感じた。いわば巨大機構相手のじれったさのようなものである。

18年をへて振り返ると、東大のような重層化した機構のもとでは、そうした方式がかえって全体の能率化につながる場合が多く、いわゆる常識的な判断を下すには適していると、いつの間にか納得し、自分でもその方式に沿って行動する様になっていた。環境への有効な対応のための順応性の発露ともみられるが、一面では慣れによる批判精神の麻痺を反映するものかと自戒している。

そうした情況にあったとは言いながら、懸案だった遺伝子実験施設の創設が、私の在任中に小規模ながら達成されたのは、やはり東大を背景にし

て可能であった事であり，ことに理学部のスタッフの皆様が絶大なご支援によりはじめて行いえたものと深く感謝している。また大学院重点大学構想の議論が現在の状態にまで盛り上がり，持続し

ているのも，東大としては目を見張るべき事である。火付け役ともいえる理学部が，計画実現のために是非とも頑張って戴きたいものと期待している。